

渚滑川河川整備計画検討会（第4回）議事要旨

- 日 時 : 令和5年12月22日（金）15:00～17:00
- 開催場所 : 紋別市民会館（WEB開催併用）
- 出席者 : （会場参加）渡邊委員長、根本副委員長、久保委員
 （WEB参加）笹木委員、塩本委員、長坂委員、吉川委員（以上7名）
 ※委員長、副委員長以降の順は五十音順

- 議題 1. 前回の検討会でのご意見について
- 2. 渚滑川水系河川整備計画〔変更〕（原案）について

■議事要旨

1. 前回の検討会でのご意見について

- ・ 特段意見なし。

2. 渚滑川水系河川整備計画〔変更〕（原案）について

- ・ 想定被害額には、水産業、特に加工業の被害額も含まれるのか。（委員）
 → 加工業等の被害は含んでいない。（事務局）
- ・ 洪水で海への影響により水産加工業が被害を受けた場合は、被害額はこれよりも大きくなる可能性があるかと理解してよいか。（委員）
 → そのとおりです。（事務局）
- ・ 想定被害額には、建物、公共土木施設等の直接的な被害だけで、氾濫により交通網が遮断され、それに伴う経済被害などは一切含まれていないと考えてよいか。（委員長）
 → そのとおりです。（事務局）
- ・ 河川の流量が大きくなると沿岸域への淡水供給量が増加するとともに、陸域から様々なものが流れ込み沿岸へ与える影響が増えてくると考えている。これは致し方のないことではあるが、沿岸漁業をやっている方にもそのことを理解していただく必要があると考えている。（委員）
- ・ 河川から海域へ流れ込むSS等に関わる取組は、渚滑川では行っていないのか確認したい。（委員長）
 → 気候変動に伴って河川の流量が増えることによる影響やその対策については、流域全体で考える総合的な土砂管理といった観点があるので、関係機関と継続的に検討を進めていきたい。（事務局）
- ・ 気候変動を考慮した目標流量設定において、充足率97%と算出しているが、残り3%に対してはどのように対応するのか。説明のあった霞堤を整備して防いでいくという考え

で理解してよいか。(委員)

→ 霞堤は新たに整備するのではなく現状であるものを活用することを考えている。流域治水の観点からも自治体とともに住民避難や防災対策等を検討していくことになると考えている。(事務局)

- ・ 渚滑と上渚滑で人口減少と高齢者比率増の資料が今回示されたが、これは重要なデータであると感じている。示されたデータは平成27年のデータであり、そこからさらに8年が経過しており、高齢化は一層進行していると考え。防災教育や防災知識の普及のところで「地域の特性を踏まえた」との記載があるが、可能であれば「進行する地域の住民の高齢化を踏まえた」など、具体的な地域の特性を踏まえた内容となるように本文を整理していただきたい。(副委員長)
- ・ 防災教育や防災知識の普及について、実際の取組での課題などを踏まえて記述してはどうか。現場の実情等を踏まえた記述ができると、渚滑川の地域性が反映された文章になると考える。(委員)
- ・ → 本文への記載内容を検討する。(事務局)

- ・ 地震・津波に関わる訓練等に触れられており、地震・津波対応には情報伝達が極めて重要と考える。地震・津波発生時には停電が伴うことも予想されるため、「停電等の事象を踏まえた」など具体的な内容となるように本文を整理していただきたい。(副委員長)
- ・ → 本文への記載内容を検討する。(事務局)

- ・ 浸水実績図が記載されているが、氾濫したときに発生した問題を明確に記述していただくと、今後の流域治水の方向性や今後実施すべきことが見えてくると考える。(委員長)
- ・ → 過去の洪水での状況等を踏まえて、本文への記載内容を検討する。(事務局)

- ・ コンセプトで2℃上昇との記載があるが、4℃上昇は触れなくてよいのか。(委員)
- ・ → 河川整備の考え方の2℃上昇は、ハード整備を対象としている。なお、避難や危機管理を検討する場合には、4℃上昇も踏まえて検討する位置づけとしている。(事務局)

- ・ 河道掘削とケショウヤナギとの関係について、イメージ図では、平水位と融雪期最高水位程度でそれぞれ水がかぶる高さで掘削することが示されている。平水位よりも高いところを裸地化することは、ケショウヤナギの更新の機会をつくるという意味からは望ましいと考えている。そういう点から考えると、中流域のほうも、ケショウヤナギが集中的にパッチとして残っているのであれば、それを母樹として残して、現在別のヤナ

ギになっているところを重点的に掘削する。水面高さも考えて、2段階ぐらいの違う高さで掘削した方がケショウヤナギの更新という面では工夫になると考える。掘削断面形状をでこぼこにする、高さを変えて掘削することはケショウヤナギの保全方法としては、新しい方法と考える。(委員)

→ これはイメージ図であるため、掘削の実施にあたっては現地調査を踏まえて様々なパターンの断面形状を考えていきたい。委員には具体的な掘削方法検討時にご相談させていただきたい。(事務局)

- ・ 計画には、すごくいろいろなことが盛り込まれており、川はいろいろなことに関わっていることをあらためて感じたところである。防災教育では、学校教育や市民団体、自治体など関係機関と連携して推進していくのがすごくいいことと思っている。何か起きたときのための連携にとどまらず、防災教育などを通じて日頃からいろいろな機関との多元的な連携が大切と感じた次第である。(委員)

→ 地域の関係機関も含めて、いろいろと繋がりを持ちながら今後も取組を進めていきたい。(事務局)

- ・ 防災教育だけでなく、環境教育や河川利用教育なども推進していただきたい。(委員長)
- ・ この地域は自然にすごく恵まれているため、子どもたちも自然に親しんでいると思っている。様々な市民団体があると聞いているため、それぞれと連携することで取組を進めるうえでのモデルにもなっていくと考える。(委員)

→ 環境教育や河川利用教育なども引き続き推進していきたい。(事務局)

- ・ 河川維持管理でデジタルトランスフォーメーション(DX)の推進とあるが、これから人が減っていくことを踏まえるとこれはとても大事なことと考える。AIやICT等の技術は、異常検知や樹木管理、不法投棄対策などにも使えると考える。さらに危機管理体制構築・強化の部分でもDXの技術が使えると考える。例えば、ドローンを使っての撮影、破堤の検知、水温検知、人の避難状況、樋門の閉扉の確認などにもAIを活用し、人員が少ない中、夜間の監視も含めて活用できると考える。危機管理体制構築・強化でもDXに関わる記載を追加してはどうか。(委員)

→ 本文への記載内容を検討する。(事務局)

- ・ カーボンニュートラルに関連し、樹木はその場で腐らせ土にするのが炭素固定としては理想と考える。燃やしたり、チップ化するとCO₂を排出する。しかし、川の場合は流木の発生など治水上の問題があるため、伐採木をそのまま放置することはできない。伐採した樹木を利用するのはいいが、それはただの利用であって、カーボンニュートラルではないと考える。(委員)

→ カーボンニュートラルについては、植樹や礫河原の復元によって、新たにケシヨウヤナギが生育することで CO2 の排出量を抑制する、そういった観点も含めてカーボンニュートラルと考えている。(事務局)

- ・ 委員からいただいた意見を踏まえて原案を修正する。修正箇所は渡邊委員長に確認していただいたうえで、関係住民の意見を聞く手続きに入りたいと考えている。(事務局)
→ 了解した。(各委員)

以 上